

## 研究ノート

大学における地域実践教育の評価手法に向けて  
「新村ひまわりプロジェクト 2012」を事例に  
The study of the evaluation in local development activities as  
university education

中澤朋代  
Tomoyo Nakazawa

キーワード：教育評価、体験学習、地域課題の解決、社会人力、学びの動機付け

### 要旨

多くの大学、とりわけ地方に位置する大学にとって、地域連携における実践教育は、近年、重要なテーマとなっている。しかし、地域課題解決型の実践活動が学習者にどのような効果をもたらしているか、また、その教育手法は何が適切か、地域への影響と大学への評価は、という各評価についての議論は未だ曖昧であり、地域実践教育を進めるうえで課題となっている。本報告は、教育効果の研究を踏まえながら、本学で実践する「新村ひまわりプロジェクト」を例に、学習成果についての評価項目を検討し、今後につなげるための課題出しを行う。まずは学習者の学習成果を見える化することから始め、そのためには新たな評価手法や項目の検討が必要である。具体的には、活動日数や内容や、アンケートやレポートといったアウトプット評価と、Eポートフォリオや、ルーブリックといったアウトカム評価を、総合的な質的評価として検討する。

### < 目次 >

1. はじめに（課題背景）
2. 研究課題（方法）
3. プロジェクトからみた学習成果
4. 学習効果の評価と今後の課題（考察）
5. 今後の展望（まとめ）

## 1. はじめに（課題背景）

近年、多くの大学が学生教育の特色の一つとして、地域の課題解決ワークショップや、商品開発・実証実験など、新たな地域のニーズに対応する活動への学生参加を、高等教育における教育として推進しはじめている。とはいえ、2008年における調査結果では、大学が組織的に体制を整備して学外での参加型学習を支援しているところは多くないと指摘され、学問体系も「環境学」などとした俯瞰的な学問体験となっていない、という課題がある（地球環境戦略研究機関 2008）。しかし、「今、まさに存在する」、「常に変化している」地域課題に対し、様々なアプローチから解決方法を見出し、学問と実社会をつなげることは、学習者が知識と能力を高めつつ、地域社会人としての力を身に付ける教育として期待が持てる。

これは国際的な議論となっている持続可能な開発のための教育（ESD）の、高等教育における教育プログラムと言い換えることもできよう。そこでは社会の持続可能性に向けて、高等教育が変革し、高等教育機関自体が「学習する組織」となり、戦略的に改革する必要が指摘されている。つまり、バラバラに行われがちな「教育」「研究」「運営」「地域貢献」が相乗的にリンクする「全組織的アプローチ」の重要性が議論されているのである（Tilbury・Wortman2008）。

この地域課題を参加型学習として行う場合の、「評価をどうするか」ということを念頭に活動を捉え、企画運営することは教育機関のシステムとして必要である。しかし、先の地球環境戦略研究機関の報告（同 2008）にあるように、その活動をどのように実践し、教育効果を評価するかについては、これまでもそれぞれの指導者が感じた学生の取組への姿勢、事業の成功度合いや、相手方とのコミュニケーションの進展度合いなどを含む、「個々の指導者の力」という枠の中で、主観的で総合的な感触の中で判断されてきた。

この研究ノートで例にあげる松本大学は、2002年に開学、地域立大学を掲げ、その前身であった短期大学時代より続く、地域に根付くコンセプトにより独自性を発信してきた大学である。具体的なシステムとしては、講義が大学施設内にとどまらず、地域全体がキャンパスだとしてバスを講義で利用できる「アウトキャンパス制度」や、地域の人材が講師となる「サポーター制度」が設置され、利用や申請は教務課で管理している。ここでも従来から学生が多くの人に関わりながら、答えのない社会の課題をテーマに体験的に学ぶことは、学生のエンパワメントに有効であることは知られている。しかし、その教育手法や評価方法は教員のフリーハンドに任されているし、また一方で、大学の地域実践が地域の人々に周知されると大学の存在意義も高まるという関連性も追い風となって、地域での教育活動は拡大している。ここには多くの評価の視点がある。今回は日本国内の地方に位置する大学を主たる対象として、その評価の目的を整理することにより、「教育」「研究」「運営」「地域貢献」が相乗的にリンクする「全組織的アプローチ」を達成する高等教育における教育評価について検証したい。

## 2. 研究課題（方法）

### 2-1 何を評価するか

まずは何をどう評価するか、を整理することを試みる。地域における課題解決型活動を教育に取り入れた際に、そこには様々な評価したい視点が発生する。大きく分けて、①学生の能力の向上、②地域プロジェクトの成果、③教員の指導法・カリキュラム、という3点になろう。今回は、①の学習者の能力の向上（学習成果）について、アウトカムの視点——学習者が何をできるようになったか——から、特に質的評価に視点を合わせて検証したい。

### 2-2 学習成果評価の近年のテーマ

一般的に、学校教育では従来から「知識そのものの習得」や「知識習得後の自身の考察」として、試験やレポートであれば客観性のある程度担保できる、という理由で評価を行ってきた。それは同

時に、講義形式による座学中心の教育を推進する力を持つと考える。しかし、大学教育の現場の感覚からすると、学生は講義と同じくらいに実体験を求める傾向にある。適切な動機づけやふりかえりを持つことにより、主体的な学びの動機が生まれ、実体験という情報溢れる環境から、研究内容や思慮が深まる傾向がある。

こうした「体験学習<sup>1)</sup>」の手法を用いたカリキュラムについて、まずは、高等教育における学習者による知識や活動の構成を重視する授業と、講義型・知識伝達型を含む一般的な授業との差異や共通性を検討することは、カリキュラム開発において重要である、と尾澤（2003）は述べている。目的を持つ教育活動である以上、その評価もまたどうあるべきかが問われる。

国は、「学士力」として様々な能力をあげているが、地域実践教育によって得られるのは「課題解決力」や「コミュニケーション力」、そして社会に出て必要とされる、「自己管理能力」「チームワーク」「リーダーシップ」等を指摘している（文部科学省 2013）。これらは、いわば「知識の使い方」「社会人力」を評価することであり、主観に影響される質的評価なくしてはその効果は計ることができないと考える。これらは本来、家庭や地域で得る能力であったために、学校教育や大学教育で学ぶ内容とは思われてこなかった。しかし、現実ではこれらの能力なくして、社会企業への就職は多く困難である。大学が変質する中で、教育現場が多くのジレンマを抱えながらも、実践教育に取り組んでいる。その教育効果測定、特に質的評価に期待する部分は大きい。

### 2-3 Eポートフォリオとルーブリック

質的評価を検証するために、ポートフォリオによる評価は一般化しつつある。近年では、それをデジタル化し、学習者・指導者が共有できる形態である「Eポートフォリオ」の開発が、国際的にも進んでいる（芦沢 2012）。本学のような地域貢献型プロジェクトに学生が参画する場合も、学生・教員・事務職員・必要により地域の関係者、に共有可能な E ポートフォリオの開発と、その利用法を構築することが、一つの方策として考えられる。

もう一つは、学習段階を見える化する「ルーブリック」の作成である。学習者がプロジェクトを通じて、いつ、何が、どのくらいできるようになったのか、という能力の変化を、その能力ごとに「ありたい姿」と「各段階の姿」で整理し、長期にわたり自己評価できる評価表である。

今回は、Eポートフォリオとルーブリックの項目立てをするために、そのための材料として1つのプロジェクトを例に、学生のアンケート及び事後感想をもとに、評価視点の洗い出しを行う。

## 3. プロジェクト例からみた学習成果

### 3-1 「新村ひまわりプロジェクト」の概要

最初に、事例とする「新村ひまわりプロジェクト」について簡単に紹介する。このプロジェクトは4年目を迎えたが、元々2面性がある。当初は地域的话题を作り、地域を明るく元気にするための活動であること。活動を続けるうちに、学生が主体的に関わることで、個人やグループが社会で必要とされる能力を身に付ける学びの場である。

元々は地域が持つ課題—地域に目立った名所や特徴はなく、観光の通過点になってしまうことや、住民が地域性を共有できる象徴を作りたい、ということから、花の村・新村（にいむら）をPRしようと、JA青年部が主体となってひまわりの植え付けが始まったのが活動の始まりである。2009年の開始時より、JA 新村青年部は景観作物としての開花と、搾油用の品種を播種することで油を搾り販売する計画を立てて実行した。大学はこれらのPRの場をサポートする役割でスタートした。そして3年間の継続から、ひまわり畑の知名度が増し、マスコミでの紹介や、毎年のように問い合

<sup>1)</sup>体験学習法(西田真哉解説)体験学習法とは、DO 体験する→LOOK 指摘する→THINK 分析する→PLAN (GROW) 概念化して次を考える、という学習循環に基づき指導するというもので、各段階の学習者の気づきと学習者同志の分かち合いを重要視する。

わせが来るようになった。ひまわり祭りという学生主体のイベントを満開に合わせて毎年実施している。一方で油の販売は難しいことに直面し、2012年からは油の生産を止めて、農作物販売の活動は停滞している。

表 1

活動内容
① 新村地区に一面のひまわり畑を開花し、その PR や利用から地域を元気にする JA 新村青年部との連携による栽培、マスコミ等での PR、収穫と加工販売
② 学生がひまわりの栽培から PR に関わることで、体験学習法に基づく学びの場をつくる ひまわり祭りブースの企画と運営による PR、商品開発、学びの評価ほか

学生を今年も新たに募集したところ、昨年度に活動した 3 年生 2 名が継続し、1 年生からは別の社会活動でチームを組む 5 名が新規に参加、ほか講義で知った学生が 1 名の、計 8 名が主たるメンバーとして活動を始めた。学生の多くが初めてであり、ゼロから話し合いながら活動を進めた。

### 活動の記録

#### (A) 活動の実施

プロジェクトの学生募集、地域関係者との連携は例年通り実施できた。

ひまわりの開花、イベント共に、スケジュールはずれ込んだものの予定通り実施できた。

#### (B) プロジェクトのアウトプット（実際の展開）

##### ① ひまわりの開花

開花場所については、今年度は松本大学の借用地 0.6ha 程度に実施した。（総合グラウンドと野球場の間にある農地。奥氏、大久保氏の所有。）今年度は 8 月上旬に開花の予定であったが、天候による作付けのトラブルがあり、植え直しをしたため、8 月中旬お盆直前の開花となり、イベントの日程を 1 週間ずらして対応した。栽培そのものは成功した。

##### ② 地域活動との連携、イベントの開催

開花時期に併せて、学生が企画・運営する形で「ひまわり祭り」を運営した。学生が中心的に動き、松本電鉄、新村公民館、新村保育園、山望苑（高齢者福祉施設）へ交渉し、協力を得てイベントを盛り上げ、PR を行った。当日は野菜や飲み物の物販と、美術展を 9:00~11:00 と 15:00~17:00 の 1 日 2 回、8 月 11・12 日（土・日）の 2 日間にわたり行う計画とし、内容は全て予定通りにできた。

#### (C) 中間成果

ここでは質的中間評価<sup>2)</sup>（記録）を以下に記述する。このプロジェクトはもともと天候の変動という外部要因から免れることができない。今回は開花日程が、当初の予定より 1 週間ずれ込み、スケジュールの変更が 1.5 か月前に行われた。

ひまわり祭りは、満開のひまわり畑の隣にある大学駐車場を土日に開放し、テントを張りブースを設ける企画である。企画から広報・準備まですべての作業を行う。活動は開花予測日の前 1 か月半で集中的に行い、毎週の昼休みに定例打ち合わせをしながら、個別作業を同時に進めた。

ひまわり祭りの物販展示は、何名かの学生が独自ルートで仕入れた特産物や飲料の販売を行うことに意欲的だった。過去の経験から 1 日中展示についているのは効率的でないと学習していた学生の提案に寄り、人の流れに合わせて午前は 9~11 時、午後は 15~17 時と時間を決めて開催した。特別企画としてひまわり美術展を開催、近くの新村保育園に協力をもらい、全園児

<sup>2)</sup>中間評価とは、プロジェクトの最中に目標を見直し、軌道修正をするための評価である。

の絵が集まったほか、老人福祉施設の利用者による共同作品、また大学美術部のイラストや大学関係者の絵画などが展示できた。また、昨年、震災復興として神戸から引き継がれたひまわりを栽培した経緯から、この「復興ひまわり」の種を来場者に無料配布を行ったことは新聞でも取り上げられた。

図 1 販売の様子



図 2 ひまわり畑



図 3 美術展の様子



当日はテレビで行事のテロップで紹介されたことで県外から訪問した人や、近くでサッカーの試合があり、駐車場を利用しながら訪れた人が多かったため、結果として販売物は8割方が売れた。しかし実質は、ひまわり畑のみを見に来て写真を撮っていく人が多く、ブースはフェンスに囲まれてアクセスの壁があることもあり、わざわざ足を運ぶ人はその中の1~2割という印象であった。美術展は関係者に多く見てもらおうと、後日、新村公民館にて公開の機会を増やした。「復興ひまわり」の種の配布などは、マスコミの注目もあり、イラストを描いた学生が主にこの取材対応をした。

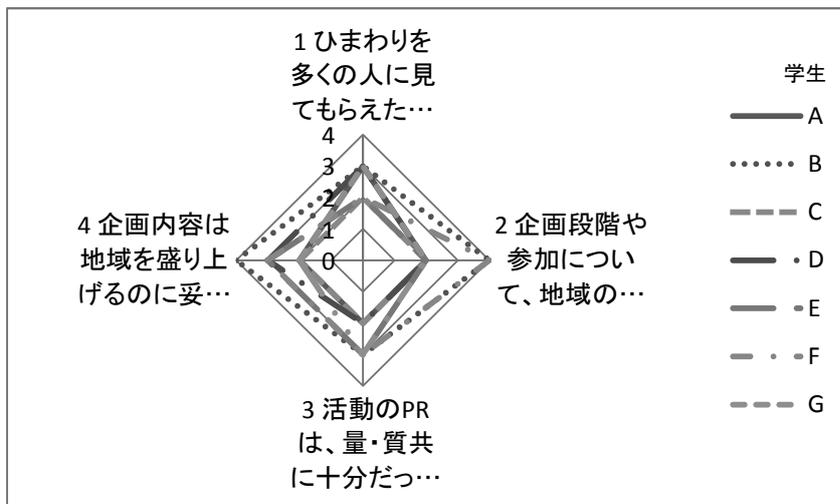
### 3-2 アンケートによる自己評価

このプロジェクトを通じて、学生が何を感じていたかについて事後アンケートを行った。以下(ア)、(イ)がその結果である。1~4の数値による達成度とコメントを記入。関わった学生は1~3年生で計8名、有効回答7件であった。

#### (ア) 活動に対する自己評価

中間値2.5を基準として、全ての項目の平均値は2.63で、やや上回った。つまり、事業は予定通り達成でき、概ねうまくいったが、とりわけ大成功でない、というレベルで学生は評価している。

図 4 ひまわりプロジェクトがうまくいったか

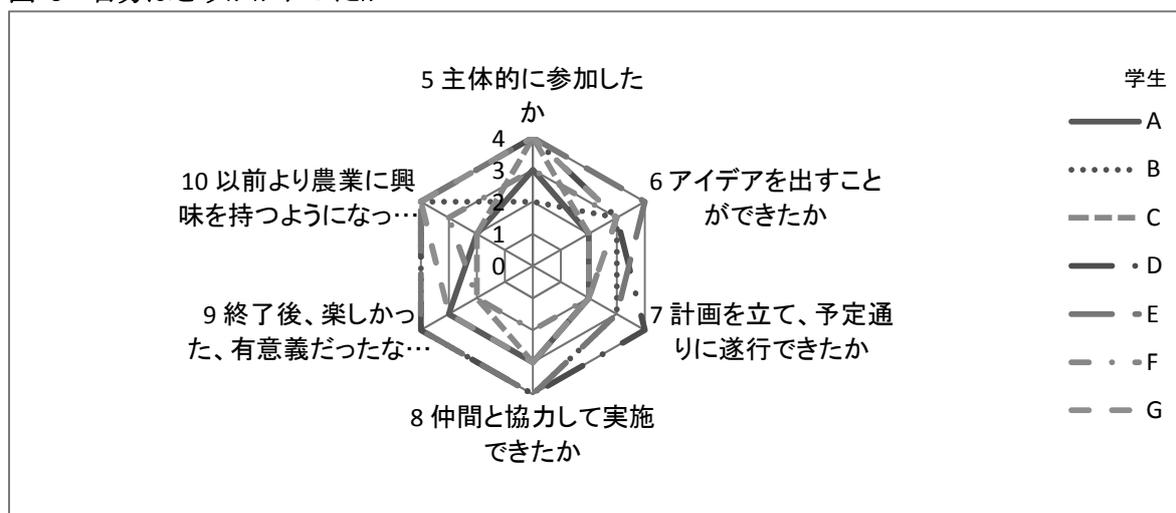


#### (イ) 自身の関わりについての自己評価

中間値2.5を全ての項目で上回り、平均値は3.08で、活動内容の評価よりも自己の関わり方についての評価が高い。自分はそれなりに関わることができて、貴重な体験であり、予定通り実施でき

たので有意義だという評価である。しかし、準備など想定以上のすべきことがあり、知識が不足し、学生同士で完結できなかった点で、自身の力が足りないと気づき、低評価となった学生もいる。

図 5 自分はどうかかわったか



### 3-3 反省会

全ての年度活動を終えた反省会として、年度末に、学生・JAの代表を交えた活動の事後評価を行った。学生6名とJAの代表者が参加した。最初に全員で、上記のアンケート形式で記入したものを相互に読み合い、その後にフリートーク形式でグループディスカッションを行った。主な内容を以下にまとめた。

#### ① 学生の学びの視点から

多くが1年生のメンバーであり、大学に入ってからすぐに貴重な経験ができたことと全体的にポジティブな感想が多かった。継続についても、「ひまわりの花」という明るく、喜び、平和のイメージが重なる活動に、地元の人々との対話の機会も増え、関わりたいという声が多い。自分たちができるところは自分たちでやりたい、という発言も出てきた。

#### ② 地域活性の視点から

JAの代表から、活動の経緯に加え、ひまわり油の販売も考えたプロジェクト経営を悩んでいるとの発言に、学生からは「景色に価値があり、商品化しないことも一策」とのアイデアが出された。この学生たちの発言により、来年度は学生がもう少し主体となってひまわり畑の運営をしたいという希望が出された。

## 4. 学習効果の評価と今後の課題(考察)

### 4-1 学習成果の評価項目

上記の結果から、学生の自己評価にて注視された項目は、以下にまとめられる。

- ・実施に直接関わることができたこと
- ・スケジュール通りに物事が進んだこと
- ・自分の役割があり、仲間と協力できたこと
- ・地域の人と直接関わったという事実

これに対して、終了直後の時点で担当教員は、「事業に対する専門性や達成度がまだ十分ではない」と感じていた。しかし、特に習熟度の高くない1年生が多く、このことが学生の達成感や満足度にそれほど大きく左右せず、注目されていなかった。また、教員の見えていないところで、学生は多くの時間を丁寧に携わっている痕跡が見られ、学生の自己評価と教員の見える範囲での評価を比較すると、総合的な評価に多少の「ずれ」を感じた。導入段階として、基本的な項目を「きちんと

できた」ことは今回の学生にとっての最大の充実度であり、現在の能力での適正な「目標」であった。この学習者自身の目標の段階を教育者が必要以上に高く設定することは、適切な学習を崩してしまうこともあると感じた。ただし、意欲や経験値の高い学生については、活動自体の成功度や、そのやり方の効率そのものがモチベーションに影響し、地域という実社会との関係もあるため、プロジェクトの社会貢献度も非常に重要な要素である。

こうした実情を踏まえて、ポートフォリオには以下の視点が必要と考えた。

**表 2 高等教育の地域実践教育における E ポートフォリオのワークシート**

- ・当初設定する「プロジェクトのゴール」(チーム共通のもの)
- ・そのために必要な「すべきこと」
- ・「すべきこと」の役割分担と達成度チェック(時間軸と合わせて)
- ・関係者の相関図
- ・会議録、日誌(結果・報告書)
- ・自己評価シート

上記の項目を取り入れ、図式化したワークシートを学習者に配布、記入しながらプロジェクトを進めていく。この作業を通じて、学習者は事業評価をしながら実践に取り組むことができる。

また、こうした活動を通じて「どのような能力が得られるか」について、評価表としてのルーブリックを作成し、学習者・指導者が共に学習段階に応じた成果を確認できる評価ツールを検討した。表 3 が、地域実践教育におけるルーブリックの評価項目案である。

**表 3 高等教育の地域実践教育におけるルーブリックの項目**

- 横軸に、4段階の学習到達レベルを設定する
- ① 基盤段階(学習前の一般的な状態)、②基礎段階(知識がある状態)
  - ③ 発展段階(理解がある段階)、④目標水準(高等教育に求める姿)
- 縦軸に、学習によって得られる能力を設定する
- ・地域理解
  - ・地域的自己理解(地域における自己の位置づけ)
  - ・感心・主体性
  - ・コミュニケーション能力
  - ・創造・企画力(計画・情報・アイデア・表現)
  - ・実行・推進力(交渉・責任・協調)

地域課題解決型の体験学習により、社会人として必要な能力の向上を期待し、自己評価できる仕組みは学習者のモチベーションを高めることにもつながる。また、いずれはこの能力が身に付く因果関係が証明できれば、体験学習が学びへの動機付けだけにとどまらず、学びのカリキュラムや教員の意識、地域実践教育の展開方法などの効果的な方策を得ることができる。今後の研究によってさらに課題を検証したい。

#### 4-2 評価の手順の再整理

こうした作業を踏まえ、地域実践活動における学習効果の測定には、体験学習法や PDCA サイクルを活用した自己評価を含む、多様な質的評価が馴染むと考える。最後に事業の展開に合わせて、評価の手順を以下の通りに整理する。

- (ア) プロジェクトスタート時の目標設定(6W1H・ワークシートの利用)
- (イ) 計画に沿って実行しながら変化を観察
- (ウ) 変化の大きな時点で状況把握をし、関係者で中間評価を行う(ワークシートの利用)

- (エ) 目標の再設定（ワークシートの利用）
- (オ) (イ)～(エ)を繰り返す
- (カ) プロジェクトの終了時評価を行う（計画と実行内容のすり合わせ、変化の観察）
- (キ) 事後評価<sup>3)</sup>を行う（ふりかえりアンケート、ディスカッション等）
- (ク) 来年度の計画へ

本プロジェクトは学生の関わりでは1年を単位にこのサイクルが循環している。同時に地域振興という目的では、数年単位でのビジョンとしてのサイクルが存在する。指導者は評価の際にこれらの概念を整理しておかなくてはならない。

## 5. 今後の展望（まとめ）

Eポートフォリオを作成することにより、地域実践教育の展開を「見える化」し、学生・教員・関係者が共有できることは、一つの便利な手法である。これは、学習情報の公開につながり、学習者自身を含めた複数の目線から、評価することができる。もう一つの能力評価表「ルーブリック」の可能性は、毎年行うことにより、経年変化を見ることができただけでなく、複数の地域実践教育に参加した個人の、能力達成度の指標としても有用である。課題としては、学習者が自己評価と他者評価を把握したうえで、評価が正当であると納得するための配慮が必要だとも考える。

また、指導法の視点とつながる視点として、アンケートにおいて学生自身のコメントからも、社会人力で指摘される項目への回答が多く見出された。「やり方が分からなかった」「準備に思ったより時間がかかった」「アイデアをたくさん出せなかった」等の課題である。こうした能力の開発について、どのタイミングでスキルを伝える必要があるか、は指導上重要である。しかし、学生は一方で「(結果は)期待通りではなかったけれど、楽しくできた」とのコメントもあり、学生が等身大の成長ペースで物事をつかみ取っていく学習のプロセスを保障することも、非常に重要であると考えられる。こうした指導法についての評価の視点も、今後検証したい。

本学ではアウトキャンパスなど実践から学ぶ機会が多いが、「教育」「研究」「運営」「地域貢献」が相乗的にリンクする「全組織的アプローチ」を達成する教育評価に向けて、こうした体験学習の評価を、概念化し、残し、できるだけ簡便に「見える化」することの重要性をさらに感じている。

## 謝辞

本研究、事例のプロジェクトを進めるにあたり、多くの地域の皆様、松本大学教職員の皆様にご協力をいただき、学生も地域に貢献しました。ここに感謝申し上げます。

---

<sup>3)</sup>事後評価とは、効果の持続性を検証するための評価である。

## 参考文献

- 小澤重知.「学習者構成型授業における教授法と学習環境デザイン実験研究の評価」日本教育工学雑誌 27 (Supple) .73-76.2003
- 野村康.「高等教育におけるESD：研究の現状と課題」環境教育.20-1.25-34
- Tilbury, D .and Wortman, D.,2008,Education for Sustainability in Further and Higher Education:Reflections along the Journey,Planning for Higher Education,36(4),pp.5-16.
- 地球環境戦略研究機関. 2008.『環境省委託平成19年度持続可能なアジアに向けた大学における環境人財育成ビジョン策定業務報告書』. 環境省
- 文部科学省. 大学における実践的な技術者教育のあり方  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/41/041\\_1/attach/1291662.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/41/041_1/attach/1291662.htm) (2013.7.10  
アクセス)
- 芦沢信吾.「海外学習体験の質的評価の将来像」ウェブマガジン「留学交流」2012.11vol.20  
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/ashizawashingo.pdf> (2012.7.10 アクセス)